



1965-1971

# 「君達ダイジョウブヨ！」 ヒルケルさんの声が5年間。



左より・野村・堀・ヒルケルさん・成田・中北・豊田・伊野部

## 私達の頃のサッカー部

私達が在籍したころは、26期が活躍したぐらいで後は弱かった。

なにせ私が中1で入部したおり高2までで自分たちの期でチームが組めたのは26期だけだったのだからこれも当然のことだったのだろう。だからともかくも、佃先生は26期に一生懸命だった。

私達はほったらかしだった。本当はそうでなかったのかもしれないが、ずーっとそう思っていた。甘たれていたのだろうし、またヒルケルさんが甘えさせてくれた。そんな覚悟の部生活だから、先輩たち（特に26期）にボール

磨きとか煩わしい雑務を言い付けられるのはまずはしかたないとしても、先輩たちに仕事を割り振ろうにもなかなか聞いてもらえず結局いつまでも《ボール磨き》と縁が切れなかった。私達の頃はまだまだサッカーというスポーツはマイナーで、私も小学生の頃はご多分にもれず野球少年だった。ほとんど何も知らずに蹴球部に入った。サッカーをプレイすることより先に蹴球部に所属することが大事だった。サッカーがしたくて、ベレに憧れて入部した私達の後輩達とはずいぶんと違った。

だめな28期として叱られ続けてサッカーを楽しんだことはなかった。『君達ダイジョウブヨ!』ヒルケルさんが

声をかけ続けてくれた5年間だった。しかしあの時の私と同じ年頃になった息子がサッカーがしたいと私に告げた時なんとも嬉しかったのはやっぱりヒルケルさんの言った通りだったのか。

[野村 辰雄]

## 『TUKUSEN』

サッカーとの出会いは、昭和39年の東京オリンピックにおける日本チームの活躍であった。翌年、六中に入學しサッカーを始めたが小人数ゆえにいつも他学年との混成チームで、良い結果を残せなかった。しかし、戸狩や学校での合唱・ヘディングの練習で先輩に



怒られたこと・淳心との定期戦・送別会の伸びたラーメンなどなど思い出は尽きません。とりわけ、TUKUSENこと佃先生に怒鳴られた時のことは。

今では、すっかり大人しくなられたようですが。アッ、そうそう、確か昨年のことだっと思いますが、インターハイの予選で私の奉職する高校と六甲が対戦した時どしゃ降りの雨の中、降りしきるシュートの雨を身を挺して阻む六甲イレブンには、我々の時代のTUKUSEN魂が感じられた。

今、我が子とボールを蹴って遊ぶが、あの時、サッカーを始めてよかったなと、つくづく思う。

[成田 淳一]

サッカー部への入部のきっかけは、旧知の先輩が所属する唯一のクラブであったからだ。顧問の先生が、生徒にもっとも恐れられていた一人であることに気が付くまでさして時間はかから

なかった。最初の夏休みの練習では、ひたすらキック板にむかってボールを蹴り続けた。時々わざとボールをキック板の裏に蹴り込み、こそっと口にくんだ六甲サイダーの味はいまでも忘れられない。その当時、始まったばかりの日本リーグがテレビで頻繁に放映されるようになり、更にメキシコ・オリンピックでの銅メダル獲得がサッカー人気に一層拍車をかける。「サッカーマガジン」の発刊日には、本屋に飛び込み外国の有名選手の名前をひたすら覚えたものだ。技術はというと、甚だこころもとなく、よくいうと豪放そのもの、ただひたすらマークする相手をおい回しボールを奪い取ることにこの上もない喜びを感じた。そしてボールを前方へ思いきりキック。農民一揆のようなサッカーだった。

[堀 一朗]

中1の頃、サッカー部は中学・高校併せてやっと2チームができるぐらい

の部員しかいなかった。夏休みの練習で紅白試合をした時、自分の体格(129cm、29kg)も顧みず高2の先輩に猛烈にタックル、10日程足が腫れて歩けなかった。

高1の夏、長野県の戸狩で合宿。グラウンドは体育館位いの広さの草むら。握り飯2個にタクアン、湯飲み3杯の水で朝から夕方まで練習した。

高1冬の新人戦、メンバーが足りず、軟庭、野球、バスケット部から助っ人に入ってもらい、市大会から県の2回戦まで頑張った。

高2冬の新人戦、淡路遠征の2戦目、相手は関学、大橋(29期)のセントリングをゴール前フリーで直接シュート。パーの上10cmを越えた。もっと球に集中していたらと悔んだが後の祭り、六甲での最後の公式戦だった。

あれから二十数年、人間何事も、ここの一番での集中が大事と、いつも肝に銘じています。

[豊田 巖]